食い違う一線級

「あれ、あのプレイヤーまだいるんだ……」

「なんであんな高レベルのプレイヤーが最初の街で仁王立ちしてるんだ？」

「なんか人を探してるんだって」

「ていうか中身女のプレイヤーらしいぞ」

「マジで？ゴツい男キャラの女性プレイヤーなのか……いいな」

「やめとけやめとけ、俺らみたいな始めたばっかの木っ端なんか構ってくれないって」

夏休みに突入し、爆発的に新規プレイヤーが増え始めたために、そのプレイヤーが探す人物を見つけ出すことは困難である、そう当の本人も思っていた。

だからこそ、クランの幹部にどやされて仕方なく本拠地へ戻ろうとした道すがらに、その名を聞くことができたのはまさしく奇跡であった。

「やっぱりレベリングするだけじゃなくてプレイヤースキル？も上げないとダメなんだって」

「やっぱりそうなのかなぁ、サンラクさんと同じレベルになったのにヴォーパルバニーの攻撃、全然見切れないもんねー」

「VRゲームが上手な方はレベル1でもそれなりに戦えると言いますからね……サンラクさんのアレは相当他のゲームで鍛えてると見ましたね！」

「なんかそれっぽいこと言ってるけどリーナってばこのゲームが初VRじゃーん」

「そ、それは言わないでくださいよう！」

武器屋に寄った帰りなのか、真新しい剣を何かを真似するように振る少年、たははと笑う盗賊の少女、そして頬を膨らませる魔術師の少女。

ガヤガヤと騒々しい中でその単語を聞き取れたのは、ずっとその名前を探し、考えていたからだろうか。自分が威圧的な格好であることは承知しているため、極力驚かれないよう静かに近づき、静かに問いかける。

「あの、」

「はい……？ ひょえっ！？」

「おわあっ！？」

「うおおっ！？」

ダメだった。

そもそも傍目から見れば「気配を殺しながら初心者の背後にガチ装備高レベルプレイヤーが立つ」という中々に心臓に悪い行動だったのだが、冷静にそれを指摘する者は幸か不幸か存在しなかった。

突然として明らかに強そうな鎧騎士に話しかけられた三人組……珍妙な鳥頭のプレイヤーと遭遇したソーマ、カッホ、リーナの三人は何故こうも普通ではない出会いばかりするのかと奇しくも三人とも全く同じことを考えていた。

「な、なんだ……です？」

「……別に攻撃するわけじゃない、聞きたいことがあるだけ………だ」

素の口調と敬語が混じっておかしなことになっているソーマだが、それに対する鎧騎士もまた、ロールプレイと呼ぶには少々たどたどしい口調で三人の初心者に問う。

「君達は……サンラクという、プレイヤーと会ったの……か？」

「え、あ、は、はい……」

「森で、その……結果的には助けてもらった……のかな？」

「最初は新手のモンスターかと思ったけどね……」

草むらから突如として飛び出し、今では厄介なモンスターであると知っているがあの時点では可愛らしいウサギを斬り殺した半裸の鳥頭（割といい人だった）を思い出し、カッホは苦笑いを浮かべる。

「彼が……どこにいるか教えてくだ……くれ。」

「ええと……確かこのままセカンディルに行く、って言ってたよな？」

「もう少しレベリングしてから、とも言ってたね」

「でも貪食の大蛇の適正レベル的にもう突破してるんじゃないですか？」

（……道理で探しても見つからない）

若干楽しまれているような気がしないでもないが、彼(・)に近づくために色々と便宜を図ってくれる女店主から「奴はクソゲーを好むような変わり者だから想定外の行動をするだろうことを想定するべきだ」と言われていたが、まさか最初から森にスポーンしてそのままセカンディルへ向かっていたとは。

「……情報をありがとう。お礼と言ってはアレだけど、受け取って」

「え、ちょ」

「……じゃあ、急ぐので」

「ちょっと待っ……行っちゃっいました……」

「カッホ、何を貰ったんだ？」

「なんだろうこれ……マジック、スクロール……【座標転移(テレポート)】……？」

鎧騎士が渡したそれ……使い捨て魔術媒体(マジックスクロール)【座標転移(テレポート)】が相当先まで、それこそ攻略最前線まで進めなければ入手できないアイテムであると知るのはもう少し先のことである。

鎧騎士は、見た目からは想像もつかない俊敏さ(AGI)で跳梁跋扈の森を駆け抜ける。【座標転移】は自分が最後に更新したリスポーンポイントに飛ぶ魔法のため、セカンディルへは徒歩で向かわなければならないのだ。

（想定外の行動の可能性は考えていましたが……まさか「最初の街に寄ってすらいない」なんて……っ！！）

当然ながら一番最初の街、すなわちゲームを始めたばかりのプレイヤーが最初の拠点とするファステイアはチュートリアルも兼ねている。まさかそれを全無視してセカンディルに向かっていたとは、しかもリスポーンしていないということは一度も死ぬことなく貪食の大蛇を突破した、ということだ。

所詮は最初のボス故、初見殺しの毒糞さえ分かってしまえば楽なボスではあるが、それでも始めて一日で突破するのは驚異的だ。余程のレベリング強行軍を敢行しなければもっと早い段階で彼を……サンラクを見つけることができていただろう。

適正レベルのプレイヤー達であれば最短最速でも十分はかかるであろうエリアを二分で走り抜けた鎧騎士は、鎌首をもたげて威嚇する貪食の大蛇にノンストップで肉薄する。

「……「ハイエスト・ストレングス」、【エンチャント・ヘルフレイム】、「アポカリプス」！！」

一歩目でSTRに大幅なバフをかけ、二歩目で構えた大剣に属性を付与し、そして三歩目で踏み込み……

「毎回ボスと戦わされるのは何とかして欲しいですね……シャトルラン的にはあったほうがいいんでしょうが。」

セカンディルへと走る鎧騎士の背後、威嚇した体勢そのままに貪食の大蛇の身体は縦に真っ二つにされ……その場には確定ドロップアイテム「貪食の牙」だけが残った。

誰にとって幸か不幸か、それは午後の出来事だった。

エリアボスは一度次の街でリスポーンポイントを更新してから以前の街に戻ると普通にリポップします。エリアボスを倒してリポップさせて……を繰り返す行動を「シャトルラン」と呼びます